異世界でおまけの兄さん自立を目指す8

ナトル
ジュンヤを異様に崇拝している
司教。王都に瘴気を撒き、
王の間を占拠している。
エルビス
ジュンヤ付きの侍従で、
庇護者かつ恋人の一人。
生真面目だが
ジュンヤには甘い。
ダリウス
カルタス王国の近衛騎士団長で、
庇護者かつ恋人の一人。
元遊び人だが現在はジュンヤ一筋。
レニドール
ラジート神が取り憑いている
山の民の青年。
ナトル討伐のため旅に同行している。
マテリオ
堅物な神官。
巡行を共にするうちに、
庇護者かつジュンヤの
恋人の一人になった。
ジュンヤ
神子召喚に巻き込まれ、ゲーム世界
に転移した平凡なサラリーマン。
神子としてカルタス王国を巡行し、
各地の穢れを浄化してきた。
現在は王都に向けて移動中。
エリアス
カルタス王国の第一王子で、
庇護者かつジュンヤの
恋人の一人。
愛称は「ティア」。

ＢＬゲーム『癒しの神子と宵闇の剣士』の世界におまけで召喚された俺――湊潤也は癒しの神子として、ここカルタス王国全土を穢す瘴気を祓う巡行の旅をしている。

瘴気の原因であるミハ・ジアンを浄化した俺達は、拠点とするトーラント領レナッソーに戻った。残すは王都だけ……と思いきや、なんと国王と宰相達がレナッソーに避難していた。

主導したのは宰相かもしれないが、行き場のない王都の民を見捨てて逃げた国王に、誰もが怒りを覚えた。だが、まだ断罪するのは時期尚早だ。今は怒りを腹に収め、粛々とその時に備えている。

レナッソーに戻ってからの二日間、避難民の浄化や支援に走り回る一方で、俺は国王の侍従やチェスター妃にちくちく嫌がらせをされていた。

かなりイライラさせられたが、ようやく出発できる。見送りにはロドリゴ達や騎士、オレイアド殿下が来てくれた。国王と宰相は休養中だと言い、チェスター妃も理由は知らないが、やはり姿を見せない。

国王は本当かもしれないが、宰相やチェスター妃は義理でも俺に頭を下げたくないのだろう。なんて大人げない人達だ。

彼らのことはどうでもいいが、ここでミイパとはお別れとなるのが辛かった。ミイパはずっと、王都に行って手伝いたいと駄々を捏ねていたので、いよいよ別れる段となった今も未練がましい目で俺達一行を見ている。でも、ここから先はもっと危険だし、子供を巻き込めない。涙目で頬を膨らませているミイパの頭を撫でてやる。

「ミイパ、元気でな。気をつけて帰るんだぞ」

「神子さん……これから、もっと大変なんだろ？　その、気をつけてな。あのさ、オレに優しくしてくれてありがとな。ズズッ……」

目を真っ赤にして洟を啜っている。この子は小生意気だったが可愛いところもあったし、山の民の能力も頼もしかった。俺は、潤んだ瞳から必死に涙が溢れないよう耐えているミイパを抱きしめた。

「俺のほうこそありがとう。ミイパにいっぱい助けられた。山の民と野の民がもっと仲良くなれるように頑張るから、応援しててくれ。必ずまた会おう」

「……うん！」

体を離して握手をする。

「道中はレミージョの言うことを聞くんだぞ」

やんちゃなミイパが無茶しないよう、レミージョが村に帰るまで付き添ってくれる。

「分かってる。それと、最後にアランと話したい」

突然名前を出されたアランはきょとんとしている。

「俺？」

「王都で騎士になるんだよな？」

「そうだよ？　何か文句ある⁉」

最初の頃はミイパが絡んでいたが、今はアランが突っ掛かった言い方をしている。そろそろ素直に友達になればいいのに。

「オレ、いつか王都に会いにいくから待ってろ」

「なんで？」

「なんでって……えっと！　オレが成人したら王都に行って働く！　あと一年だ。話はその時にする」

気のせいか、ミイパの顔が赤いような。もしかして友情以上の気持ちがあるのか。ついにやけそうになるのを堪える。

「今すればいいだろ？」

「一年後だ！　それまでヘタれて騎士見習いやめるなよな」

「やめないよ！　バーカ！」

ミイパ……もうちょい言い方ってもんがあるだろうに。

大人達は色々察して、やれやれという顔で子犬の喧嘩のような二人を見守っていた。

「そこまでにしろ、チビ共」

ダリウスが割って入る。

バシッ！　バシッ！

「ギャン！」
「いたっ！」
頭頂部をダリウスの手のひらで叩かれた二人は一瞬で静かになった。手加減していてもすごい音だ。そんな二人の横をすり抜けて、オレイアド殿下がティアに駆け寄った。
「兄上！　道中お気をつけて」
心から心配しているのが分かる。こんなにいい子の親を断罪するのは心苦しい。きっとティアはもっと苦しんでいるだろう。
「オレイアド、まだ無理をするな」
「大丈夫です。母上は具合が悪いとのことで、見送りに来られなくて申し訳ありません」
「体調が悪いなら仕方がない。疲れたのだろう。大事にしてくれと伝えてくれ」
ティアはいつも通りだが、オレイアド殿下と話す眼差しは柔らかい。
「お気遣いありがとうございます……。あの、兄上。王都は本当に酷(ひど)い有様なのです。どうか、どうか、お気をつけて……」
「ああ、ありがとう」
仲睦まじい二人から目を逸らす。浄化を終え真実が明らかになった後、彼らはまだ笑い合えるのだろうか……
別れに後ろ髪を引かれつつ、馬車に乗りレナッソーを後にした。しばらくおとなしく乗っていたが、馬車に飽きてしまった。俺は外に出て、単騎で護衛していたダリウスの前に乗せてもらった。ポク

ポク響く蹄(ひづめ)の音が心地いい。
「あ～、本っ当に陛下はめんどくさかった！　なんだってエロいことしたがるかなぁ！　王都で散々邪険にした癖に図々しいと思わないか」
「ジュンヤが美人すぎるからだな。マジで気が気じゃなかったぜ。早々に出立したのは正解だな」
もう恋人達の欲目には慣れたので、それは置いといて……面倒なのは国王だけじゃなかった。
「宰相の異様な持ち上げ方も気持ち悪かった。今更遅いって。なぁ？」
「確かに。ありゃ、最悪だったな」
国王と宰相を浄化した後、「ジュンヤ殿のお力はすごい～」とか、「うちのロドリゴと～」とか言われた。媚(こび)を売ると決めたら恥なんてかなぐり捨てられるらしい。なんとか俺を彼らの屋敷に呼ぼうとしていたらしいが、ティアがガードしてくれたおかげで無事だった。神子(みこ)は万能薬と言い放っていたのにも腹が立つ。
「ある意味感心するけどな……まぁ、王都を浄化したら、彼らの悪行も終わりだ。ティアと色々仕込んであるんだろう？」
「もちろんだ。レナッソーで気が抜けて、証拠を増やしてくれるかもな。そんな嫌な話より、もっと楽しい話をしようぜ！　ここは見通しも良いし安全だ。早駆けしてみるか？」
「楽しそうだけど……良いのか？」
「おう！　駆けてスカッとしようぜ。練習した内容、覚えてるよな？」
ここに来るまでに時々乗馬の練習をして、ゆっくりなら一人で乗れるようになっていたが、早足

はまだちょっと怖い。本気の走りなんかもっと無理！　でも、ダリウスと一緒なら大丈夫だ。
「うん！　走りたい！」
「俺と息を合わせろよ。ラド、ウォル！　俺達ちょっと駆けるからな！」
「えっ？　団長っ⁉　待っ」
「キュリオ、行くぞ！　はっ！」
ダリウスは返事を待たずにキュリオの腹を軽く蹴って駆け始めた。
「お～～！　速い！」
風景がどんどん変わっていく。草木の香りも心地良い。風を切って走っていると、国王や宰相の相手をして鬱々とした気分も晴れていく。
「ダリウス～！　最高だな！」
「おう、そうだろ？　キュリオ、お前の本気、見せてやれ！」
気合を一発入れると、キュリオはさらにぐんっと加速して駆けていく。まだスピードを出せるのか。落とされないよう、鞍の持ち手をしっかりと握る。ダリウスが俺のために鞍を改造してくれて本当に助かった。
「キュリオ、すっげぇ～！」
二人乗せているにもかかわらず、キュリオは凄まじい速さで駆けた。思う存分走り、キュリオを休ませようと下馬すると、思ったより皆と離れてしまっていた。息が整ったら戻ろうとダリウスと話しているうちに、誰かが来るのが見えた。

「あ、誰か来た。無茶するなって怒られるかな」
「確かに離れすぎたな。でも、少しはスッキリしたか？」
「うん、ありがとう！　キュリオも疲れただろう？　めちゃくちゃカッコ良かったぞ！」
ダリウスが腰から水筒を取り出し、手に水を溜めて差し出してやると美味そうに飲んでいる。荒い息を整えたキュリオは、ブフッと鼻息を鳴らし鼻面を擦りつけてきた。
「こいつも常足ばかりで飽きてたし、スカッとしたさ。なぁ？」
キュリオはダリウスに答えるようにヒヒンと嘶き、鼻面をグリグリと押しつける。甘えているキュリオも可愛いが、誇らしげにキュリオを撫でるダリウスが愛おしい。
「団長～！　もうイチャイチャタイム終わりっすかぁ～？」
こちらに来たのはウォーベルトだった。すねた口調で茶々を入れる。
「なんだよ、その面は」
「殿下に、ジュンヤ様とのイチャイチャがいきすぎないように見張れって言われたっす。なんでこういうのは俺の役目なんすかね。納得いかないっす。ニッコニコのジュンヤ様は和みますけど～！」
突然、ダリウスが俺の顔を両手で覆った。
「うるせえ、見るな、近寄るな！」
「うわっ！　横暴！　見たって減りませんよ！」
「いいや、減る。お前が見ると減る気がする！　もう戻るから先に行け！」
俺はダリウスの手をそっと顔から外す。

「本当にやきもち焼きなんだから……。ウォーベルトも仕事で迎えに来たんだぞ」
ウォーベルトはブンブンと首を縦に振った。
「そうっす。一緒に帰らないと俺が怒られるんす。殿下からの命令で、エッチ禁止っすよ」
「さすがにここじゃしねぇっての。信用ねぇな……」
ティアの命令と言われて、ダリウスはブツクサ言いながらもおとなしく従う。もう一度キュリオに乗って皆のところへ戻ると、ダリウスはティアにこっぴどく怒られた。
「ティア、俺も憂さ晴らしになったし、そのくらいで許してやってくれないか」
「ダリウスばかり狡い」
「じゃあ、しばらく一緒の馬車に乗せて。話をしようよ」
「もちろん大歓迎だ。ダリウス、そなたはしっかり警護をしてくれ」
ひらひらと右手を振って命じるティア。これは拗ねているな。どいつもこいつもやきもち焼きだ。でも、レナッソーでもストレスが溜まっただろうし労ってやろう。
そう考えながら馬車に乗り、ティアの左隣に座る。
「仕事は片付いた？」
「あぁ、どうにか」
「お疲れ様。いつも頑張っていて偉いよ」
手を握って頭をポンポンすると、ティアは嬉しそうに微笑んだ。以前は二人きりの時もキリッとしていたのだが、最近は柔らかい表情を見せてくれる。俺といる時だけは気を抜いてリラックスできるようにしてやりたい。
そう考えていたら、ぐっと体を引かれ腰を抱かれた。
「ご褒美のキスをもらえるか？」
「……待って、カーテン閉じたい」
キスしようとしたティアに待ったをかけた。
「見せつけてやりたいが仕方ない」
右側のカーテンをティアに閉めてもらい、俺も左側を閉じる。イチャイチャを見られるのはさすがに恥ずかしい。
「本当に誰もいない場所で二人きりになるのは難しいな」
ポツリとティアの本音が溢れた。握ったままの手を持ち上げ、手の甲にキスしてやる。
「レナッソーでも大変だったよな。今は仕事を忘れて良いよ」
俺は腰を浮かし、小鳥の挨拶みたいな軽いキスをした。欲情しているというより慈しみたい気分だった。触れ合うたびにお互いの熱がじんわりと伝わって、一緒にいられる喜びを強く感じる。
「ジュンヤ……オレイアドを救ってくれて嬉しかった。あの子は王宮内で唯一毒されていない、私の心の拠りどころなのだ」
唇が離れた後、ティアが切なげな笑みを浮かべた。
「ティアが大事にしてるんだから、良い子だって分かってたよ」
「信じてくれてありがとう。ジュンヤは私の大事な人を二人も救ってくれたな」

「ダリウスのこと？　それ、本人に言った？」
「あれはすぐ調子に乗るからダメだ」
俺はその場面を想像して吹き出した。ダリウスが聞いたら「ひでーな」と怒るだろう。俺がそう伝えると、ティアも大笑いしている。
「ティア、もっとくっついていいかな？」
「ああ」
体を寄せ、ティアの肩に頭をもたれかけてくっつく。ティアの香水は柑橘系の爽やかな香りで心が休まる。
「こんなにゆっくりと過ごす時間は久しぶりだな……ジュンヤの優しい香りがする」
髪に顔を埋めながらセクシーに囁かれると体から力が抜ける。触れているところからティアの体温が伝わってきて、何とも言えない充足感に包まれた。
「まだ王都の浄化があるけど、やっと終わりが見えてきたね」
「そうだな。辛い時もあったが、旅が終わるのが寂しい気もする。こんな風に考えるのはおかしいのだろうか」
「俺も同じだ。だって、王都に帰ったら、ティアはもっと忙しくなるだろ。一緒にいる時間も削らないといけないかもしれない。だから、一瞬一瞬を大切にしようと思ってる」
宰相だけじゃなく、国政を投げ出した実父も、自分を排除しようとする異母弟の母も断じなくてはいけない。決意は堅いだろうが、少しでも心が休まるように寄り添いたかった。

「ちゃんと眠れてる？」
「まぁ、それなりに寝ている」
言葉を濁すあたり、あまりよく眠れていないのだろう。
「ちょっと眠ってもいいよ」
「せっかくジュンヤと二人きりなのにもったいない」
「ふはっ、そっか」
体を離して顔を見ると、笑われたのが不服なのか膨れっ面をしている。
「ティア、前より表情が豊かになったよね」
膨らんだ頬をつつくと、ティアははっとした顔をして自分の顔に触れた。
「そう、か？　いいことなのだろうか……」
珍しく動揺し、何度も自分の顔を擦っている。
「執務中とプライベートな時間を上手く切り替えられるようになったってことだよ。多分、今までのティアは執務が終わった後もずっと仕事を続けていたんだ。王子様って役割をさ」
「当然だ。王族は常に危機に備えねばならない」
「ああ、悪い意味じゃなくて。ただ、絶え間なく張り詰めた糸みたいで、いつかプツンと切れてしまわないか心配だった」
出会った頃のティアは完璧だった。完璧すぎた。あの頃は自分に余裕がなく気づかなかったが、ガラス細工みたいに繊細だった。

「今は、しなやかな柳……いや、枝になってる気がする。何か起きても簡単には折れないっていうか。言いたいこと、伝わるかな」
柳の枝と言おうとしたが、カルタスで柳を見たことがないからきっと伝わらないだろう。ティアは俯いて考え込んでいる。
「そう言われれば独断することがなくなった気がする。己の考えだけではなく、複数の人間の意見を聞いて判断しているな。一人で問題を抱えず、相談ができるようになった」
「あ、それは俺も同じだ。俺達似た者同士だな」
お互い、素直に人を頼れるようになった。信頼できる人がいるって本当にありがたい。
「気が早いかもしれないが、国に平穏が戻ったら、私と二人きりでデートをしよう」
「うん、どこがいいかな。おすすめは？」
「そうだな。誰にも邪魔されないでいられるところにしよう。乗馬もいいな。私もジュンヤを乗せてあれくらい走れるぞ」
さっきのダリウスへのライバル意識が丸出しで、思わず笑ってしまう。
「はいはい、ティアにはティアの良さがあるんだから張り合わないで」
「不安なのだ。私はたまたま王子として生まれ、運良くこの色を持っていただけだ。もしも父上と同じ色でなければどうなっていたか分からない。こうしてジュンヤと共にいることを許されない可能性もあった」
王子には王子の悩みがある。不安を抱えているのは人間として当然だ。だから一番であることを

意識していたのかな。張り合ってしまうのもそのせいだろう。
「――すまない、弱音など私らしくないな。忘れてくれ」
「いや……聞かせてくれて嬉しいよ」
「なぜだ？　みっともない姿を見せたのに」
「それが嬉しいんだ。ティアが号泣しても、逃げたくなっても、俺は絶対に傍にいる。だから安心してくれ」
「……そうか。ありがとう」
カッコ良くても悪くても全てを受け止める。そんな想いを込めて、俺達はキスをした。
それから窓の外を眺める。王都は、国王がいた時より確実に状況は悪くなっているだろう。ゆっくりと、だが確実に王都へと近づいていく。

レナッソーを出発して王都へと戻る道中、渡河のためにハルトラという街に到着した。オルディス河は以前見た時と同じく穏やかで穢れがなく、緊張している俺や皆の心を癒してくれた。
ところが、船着場についたものの小型船しか泊まっていない。そこで、エルビスがノーマに命じて確認に行かせた。
「エルビス様、今日乗船できる船は終わってしまいました」
確認しに行っていたノーマが残念そうに伝えた。巡行に同道する人数は多く、全員乗船できる船は限られている。対応可能な船は対岸にいるらしく、明日戻ってくるのを待たなくてはいけないそ

うだ。今夜はハルトラに一泊することになり、侍従や騎士が宿探しに向かうのを見送る。
「ジュンヤ様、強行軍でしたのでお疲れですよね。宿が見つかるまで、お茶でも飲んで休みましょう」
「ここに誰か残すよな？　連絡が行き違ったら困るし」
エルビスは「もちろん」と答え、柔らかな笑みを浮かべた。安心して、エルビスがおすすめだという店にティア、ダリウス、エルビスと共に向かう。マテリオは二人の神官と街を回ると言って、早々に別行動だ。どんな時も神官の仕事をサボらないのがあいつらしくていいよな。
「野営も多かったし、宿が決まったら皆も休養させてあげよう」
「ええ、おそらく、ゆっくりできるのは今日が最後ですからね」
深刻なエルビスの横顔に、現実に引き戻され、また気が重くなる。
案内された食堂で、ティアやダリウスと一緒にお茶とパンケーキに似たものをいただく。懐かしい味に自然と頬が緩む。
ティアとダリウスは、眉間に皺を寄せて警備について話し合っている。まとまって宿泊できない可能性が高いので、巡回の班分けをしているようだ。
ところが、そこへ騎士が息を弾ませ報告に来た。
「殿下、ジュンヤ様、全員が同じ宿に泊まれる手配ができました」
なんと、俺達の巡行のことを知った宿泊者達が、進んで部屋を譲ってくれたそうだ。
「ティア、お礼も兼ねて町を見て回ってくるよ。必要に応じて浄化しながら教会に挨拶に行く。エルビスを連れていくけど、いいかな」

「ああ、護衛はダリウスといつもの二人を付ける」
ダリウスが先頭を歩き、残る二人は俺達の後ろを付いてくる形だ。エルビスと並んで街を歩き始めたのだが、人々があまりにも熱狂していて驚いた。
ただ、その熱狂は歓迎で、感謝を伝える言葉をたくさんもらった。とはいえ油断はできない。振り返ったダリウスとエルビスが目配せし、万が一に備えながら歩く。買い物もあるのでヴァインとノーマも最後尾で同行している。
ひとまず、俺の悪評は完全に覆せたらしい。まぁ、これだけ頑張ったのに罵られたら今度こそやり返したけどさ。
「エルビス、船に乗る時はいつも『トラ』ってつく街に行く気がするんだけど、理由があるのか？」
「ええ。トラは川沿いという意味で、港がある街は対の名前になっているんです。ハルトラの対岸はイルトラですよ」
「へぇ～。トラがついている街には、船着場があるってことか」
「その通りです」
また一つこの国のことを知って嬉しくなる。ずっと浄化のことばかり考えていたせいか、カルタス王国についての知識は偏っている。だから、子供みたいにあれこれ質問してしまう。それなのに、エルビスは嫌な顔一つ見せずに答えてくれる。
好きを通り越して、どうしたらいいか分かんなくなるな……
そんなことを考えていたら、通りで手を振る人の中に強い瘴気を感じた。

「ダリウス、止まって。あの人、今すぐ浄化しないとまずいかも」
「今じゃないとダメなのか？」
俺は頷く。原因を断たなければ埒が明かないので、重症者以外はまとめて浄化するという話になっていた。でも、今感じた瘴気は見過ごせるものではなかった。
「通してくれ。そこのお前、こちらへ来い。神子が浄化してくださるそうだ」
ダリウスが人垣を割って一人の青年を連れてきてくれた。手を握ると彼は俯き、上目遣いで俺を見た。
「あの……実は、王宮で下働きとして働いていたんです。一度も宮殿であなたをお見かけしたことがないのに、悪評が広がっていくのが変だとずっと思っていました。でも、おかしいと言い出せなくて……俺は浄化してもらう資格がありません」
彼は青い顔で告白した。それに、小刻みに震えている。
「――そうだったんですか。でも、あの頃は俺も誤解を解くチャンスがなかったし、あなたも一人だけ反対意見を言うのは怖かったでしょう。黙っていても良かったのに、正直に話してくれてありがとうございます」
王宮内に、意見を言えない圧力があったであろうことは容易に想像がつく。下手に口答えしたらいじめや解雇の可能性もあっただろう。他にもこういう人がいたかもしれないと知れただけで救われた。
「大丈夫ですよ！　浄化しましょう」

そう言って青年の手を取るが、王宮にいたせいで他の人より瘴気が濃い。それでも、今の俺は問題なく浄化できた。彼は何度も頭を下げて、列に戻っていく。他にも数人、すぐ対応したほうがいい人がいたので浄化すると、自分もしてほしいという周囲の期待に満ちた視線が突き刺さった。浄化してほしい人が大勢いるのは分かっているけど……
「今すぐは難しいですが、後でちゃんと全員を浄化しますから安心してください」
少しがっかりしている人もいたが、了承してくれたのはありがたい。各所で浄化して実績を積んだおかげかな。
「ジュンヤ様、これまで誠実に対応されたので信頼してもらえたようですね。さすがです」
「うん。苦労した甲斐があったな～」
照れ隠しにふざけた口調で言うと、エルビスもうんうんと頷いてくれた。
また歩き始め、改めてハルトラの街並みを見物する。
「エルビスはハルトラに来たことはある？　どんな特徴があるのか知りたいな」
「はい。以前、殿下の視察に同行しました。商人が多く通る街なので交易が盛んです。トラージェから輸入されたものもたくさん見かけますね。
トラージェから王都に向かうには渡河する必要がある。そのルートはユーフォーンだけじゃないよな。トーラント領に寄ることもあるだろうし、船着き場のある街が栄えるのは当然だ。
「そうそう、以前王都でトラージェ産の真珠が流行ったのですが、ハルトラの商人がジュエリーに仕立てて貴族に売り込んだからなのです」

流行が始まる瞬間にいられたら楽しかっただろう。というか、自分達で仕掛けた商品が爆売れしたら？　そんなことを考えてワクワクした。こんな時じゃなかったら、しばらくこの街に住みたいくらいだ。

「そうか、トラージェのものが！　見たいけど浄化が終わるまでお預けだな」

「終わったらまた来ましょう。お供してもいいですか？」

「もちろん！　エルビスのいない旅なんてありえないし」

俺の答えにエルビスは珍しくオーバーアクションで喜び、見せたいものや観光地の話をしてくれた。

え、何、めちゃ可愛いじゃん……！

笑顔に釣られ、俺も口元が緩んでしまう。

「お～い、お前らばっかりイチャイチャすんなよ～」

ダリウスが俺達にやきもちを焼いて割り込んできた。

「団長殿はしっかり警護をお願いします」

エルビスが笑顔から一転しダリウスを睨む。

「チッ」

ダリウスが舌打ちし、二人が視線でバチバチにやり合っている。ここで二人が揉めたらせっかくの時間が台無しだと、エルビスの右手を握る。

「エルビス。教会に挨拶したらデートしよう」

突然デートを申し込まれたせいかエルビスの目が点になった。でも、すぐにキラキラした目に変わり、何度も首を縦に振る。ダリウスが口を尖らせているので、「あんたは今度」と視線で合図した。圧倒的にエルビスとの時間が少ないのは分かっているので、ダリウスも渋々頷いてくれた。平等って難しいよな……

喧嘩にならなくて良かったと胸を撫で下ろし、目的地の教会へ向かう。出迎えてくれたのは、この教会を任されている初老の司教だ。神官が二人いて、今は街で奉仕しているそうだ。

「神子ジュンヤ様、こんな小さな教会へわざわざお運びくださり、ありがとうございます」

司教の様子を見て、エルビスが、以前よりかなり老け込んでいて驚いたと耳打ちした。白髪が増えて顔のシワも深く刻まれているそうだ。瘴気の影響もあるだろうが、相当苦労したのだろう。

「司教様、体調が悪そうですね。手に触れてもいいですか」

司教は遠慮して触れるのをためらっていたが、俺がやりたいからだと説得した。それに、人を導く人は健康じゃないと。

手を握って浄化を流すと、司教の体が輝き神官が驚く声が聞こえた。彼らも浄化してやると、これでまた民に奉仕できると意気込んでいた。そして、俺達への協力は惜しまないと約束する司教に見送られながら、教会を後にした。

「よし！　教会も俺達に協力してくれるし、もう大丈夫だな。ダリウス、エルビスとデートしてくる。埋め合わせはするからさ」

ダリウスに伝えると、ちょっとだけ肩をすくめた。反対する気かな……

「はぁ～。エルビスは生真面目すぎて二人にしても手ぇ出せねぇだろうし、いいぜ」
「なっ!?　バカなことを言うな！」
真っ赤になってエルビスが怒っている。
「俺はエリアスといる。ラドクルト、ウォーベルト、二人の護衛を頼む。お前ら、人目のあるところでエロいことすんなよ～？」
ダリウスはケラケラと笑う。単に揶揄ただけらしい。エルビスの背中をドンと押して最前に突き出した。
「お前じゃあるまいしするか！」
「ふふふっ。じゃあ、行こう！　向こうの賑やかな店があるところが見たいな」
「……分かりました。二人共、お願いしますね」
エルビスが改めてラドクルトとウォーベルトに護衛を頼む。
「後ろにいますが、気にせずお過ごしください」
ラドクルトが請け合う。
「ノーマ、ヴァイン、買い物を頼みます」
エルビスが侍従の二人にメモを渡した。
「はい、任せてください」
二人はメモの店に向かい、俺達もデートの始まりだ。
「エルビスとゆっくり過ごすのは久しぶりだな。えっと、ユーフォーンでのデート以来？」

あの時は大胆なことをしたなと顔が熱くなる。湖のほとりでエッチしたことを思い出して恥ずかしくなった。
「そうですね。その、素晴らしい思い出になりました」
「もっと色んな思い出を作りたいな。写真が撮れたらいいのに」
「シャシンとは？」
「ああ、話したことなかったかな？　映像については話したような気がするけど……」
何気なく口に出してしまったが、この世界にはないんだよな。
「エイゾウは殿下にお聞きしました。アナトリーに何やら指示していましたので」
アナトリーは、ケローガで離脱したアリアーシュの代わりとしてユーフォーンからずっと同行していて、様々な魔道具を作っている。だけど、人前に出るのは好きではなく、ティアやケーリーさんと魔道具の開発についてばかり話している。俺達と一緒にいる理由は、『面白そうだから』という変わった人だ。
「そうなんだ。写真はカメラっていう道具を使って、見たままの姿を残しておけるものなんだ」
手で四角い形を作り、この四角の中に写った場面を切り取れるのだと説明する。エルビスは何度も瞬きをしながら聞いていた。
「それは素晴らしいですね……」
なんだか心ここにあらずな表情と返事だ。あまり興味がなかったかな。
「ごめん、つまらない話だったな。それに、俺は初めての場所だけど、エルビスは知っている場所

だし楽しくないよな」
「違います！　ただ、少しぼうっとしていました」
　知らない世界の知らない道具だ。それか、俺が元の世界に未練があったら、なんて心配しているのかもしれない。
「エルビス……悩みがあるなら話してよ。俺もエルビスの力になりたいな」
「その、ここでは言えない内容で……」
「じゃあ、帰ってから聞くよ。……今夜は一緒に寝ような」
「は、はい！　喜んで」
「話したいならもう帰ろうか？」
「いいえ！　もう少し見物しましょう。私のせいで空気を悪くしてしまいすみませんでした。あちらにジュンヤ様がお好きそうな店がありますよ」
　以前視察に来た時の伝手があると言い、職人の店や商人が工芸品を直接売りに来る問屋に連れて行ってくれた。ここからさらに仲介業者を通して各地で売られるそうだ。個性的な作家の作品や、民族色の強い民芸品が並んでいて目を奪われた。
「おお～、見たことない商品がいっぱいだ！　エルビス、この指輪、シルバーかな。彫刻のデザインがすごく素敵だ」
　珍しいものだらけでワクワクし、店主に許可を得て手に取っていく。
「エルビス、この刺繍がついたハンカチをお揃いにしよう。アクセサリーだと皆がやきもちを焼く

だろうけど、これくらいなら大丈夫じゃないかな」
　さっと会計を済ませ、エルビスに渡す。
「ありがとうございます。宝物にしますね」
　量産品なのに大袈裟なくらい喜んでいる。本当に感激屋だ。
　店を出て、また手を繋ぐ。
「さすがエルビス、俺好みの店だったよ。すごく楽しかった」
　店内を堪能し、平和が戻ったらこれらの商品を国内外に広めたいと考えていた。
「そろそろお腹が空いたのでは？　宿に帰りましょう」
　言われてみれば小腹が空いてきた。俺の腹具合まで把握済みなんてさすがだ。
　宿に戻ると、ティアはまだ視察をしているのか戻っていなかった。ダリウスが恨めしそうにこちらをジトッと見ているが、屋内は安心だし、ダリウスを含めた護衛達は任務終了だ。ティアから、自分の帰りが遅くなったら先に食事をと伝言が残されていたので、お言葉に甘えて夕食を済ませた。
　食後、俺が滞在する部屋に移動した。室内はシンプルだが清潔感がある。野営が続いたので、足を伸ばしてベッドでゆったり眠れるのもありがたい。二人部屋なので、三人に今日はエルビスと過ごすという許可を取るつもりだ。
　疲れていたのもあり、俺は椅子ではなくベッドに腰掛けた。
「お茶をお出ししましょうか」
「いや、お腹もいっぱいだしいらない。エルビスもここ、座って」

俺の左側をポンポンと叩いて誘うと、エルビスはおずおずと隣に座った。ドアの向こうに護衛がいるものの、ようやく二人きりになれた。
「エルビス、さっきの続きだ……悩みがあるんだろう？」
忘れてないよと伝えたくて顔を見上げ笑う。エルビスはハッとした顔をしてから俯いた。
「話したら、くだらないと呆れるでしょう」
「どんな悩みもくだらなくなんてないよ。だから聞かせてくれ」
言いにくいのかもしれないが、今が吐き出すチャンスなんじゃないかな。タイミングを失ったら、また口を噤んでしまうかも……。励ますつもりでエルビスの手を握った。
「私は……ジュンヤ様の近くにいると、いやらしい目で見てしまう時があるのです。恋人ではありますが、仕事中はそんなことではいけないと思っています。やきもちを焼かないよう、耐えているのですが……」
「エルビスもエッチな妄想をするんだな」
まさかそういう悩みだったなんて。他の恋人達と比べると、エルビスは性的な欲をあまり見せないから意外であっけに取られてしまった。
「そう、です」
エルビスが顔を両手で覆って背中を丸めた。真剣に話してくれたのに、俺の返事が軽かったせいか、ショックを受けてしまったようだ。
「びっくりして変な言い方した！　ごめん！」

エルビスの背中を撫でる。
「そんなに落ち込まないでくれ。むしろ教えてくれて嬉しいんだよ。だって、いつも冷静な顔をして俺の隣にいるから、そんな風に思っているなんて想像できなかったんだ」
まだ顔を隠しているエルビスに抱きつき、ぎゅっと抱きしめた。
「お慕いしています、ジュンヤ様……」
俺がエルビスに抱いている、冷静で優しいというイメージを崩したくなくて必死だったのかな。全然気にしないのに。
「エルビス、顔を見せてくれ」
右手でエルビスの左頬を包み、声をかけると恐る恐る顔を上げた。視線を合わせると、不安のせいか震えている。
「忘れないでくれ。俺とエルビスは、俺が神子である可能性や浄化の話が出るずっと前から、お互いが特別だった。エルビスに失望したりしない。なぁ、俺を信じろ。愛してる」
俺も一時期、自分自身ではなく、俺が神子だから愛されているだけなんじゃないかと不安に思う時期があった。でも、何度も皆に言葉にしてもらって自信が持てた。だから、今度は俺がエルビスにそうする番だ。
バッと顔を上げたエルビスに抱きしめられ、キスされた。俺もそれに応え抱きしめ、キスを返す。
「私も愛しています」
「うん、ありがとう。どんなエルビスも大好きだからな」

俺は指先でエルビスの鼻先をつんと突いた。すると、やっと心からの笑顔を見せた。
「そうだな……迷えるエルビスに、誰にも言ってない秘密を教えてあげよう」
「秘密……ですか？」
怪訝そうに顔を傾げる。
「うん。あのさ、王都の浄化の話。頑張るのは当然だし、気合も入ってる。でも、きっと今までで一番大変な浄化になるだろう。ナトルがどうなっているかも分からない。……だから、本当はすごく怖いんだ。皆には内緒だぞ」
一番怖いのは、犠牲が出ることだ。俺は茶化しつつも本心を吐露する。
「おや、ジュンヤ様もでしたか。私もバレたら振られそうで隠していたんですよ」
エルビスは目を見開いて、一瞬絶句していたが、すぐに俺に合わせるよう、笑いながら身震いしてみせた。そんな優しさが身に沁みる。
「あはは、良かった。仲間だな」
笑いに変えると少し心が軽くなり、安心してエルビスの肩に頭を預けた。
「どんなに恐ろしいところでも、決して離れません」
俺の肩を抱き、強い口調で伝えてくれる。
「皆が俺を勇敢だと思ってるけど、本当は弱虫なんだ」
「弱虫なんかじゃありません。皆同じですよ」
「ん……ありがとう。エルビスなら、俺が弱虫でも幻滅しないって信じてた」

いつまで経っても戦いなんて慣れない。でも、それを知っていてくれる人がいる……エルビスは俺の髪に何度もキスをしてくれた。
「エルビスだけが俺の弱みを握ってるんだよ」
「謹んで栄誉をお受けします」
真面目すぎる答えに俺は思わず爆笑する。
「固いって！　よし、難しい話は終わり！　ここからは恋人タイムだ」
エルビスにキスする。弱さも全部曝け出し、なんだか晴れやかな気分だった。

翌朝。エルビスはもう吹っ切れたのか、晴れ晴れとした顔だ。繊細な彼は人一倍周囲に気を遣い、一歩引いてしまうところがある。昨夜は本音を聞くことができたし、俺もずっと言えなかった本心を言えた。秘密を明かすことで、エルビスは自信を取り戻してくれたんじゃないだろうか。
エルビスの表情を見たティアやダリウス、マテリオは気になるのか、ずっとこちらの様子を窺っている。昨夜は三人に頼み込んでエルビスと寝たので、文句を言われると思っていたが、なぜか何も言われない。もしかして、エルビスの様子がおかしいと気づいたダリウスが話をつけてくれたのかもしれない。当のエルビスはというと、三人の視線を気にも留めず、俺の手を取り馬車に乗せてくれた。
馬車にはエルビスと侍従がどちらか一人、そしてマテリオが乗る決まりになっている。戦えない俺達は、襲撃の際にまとまって逃げられるように行動しているんだ。

「もう襲われないと信じたいですが……宰相は曲者なので怪しいですね」
エルビスがため息をついた。
「浄化の神子を害すればどうなるかなんて想像できるはずですが、宰相の一派は違う意味でもジュンヤのことを狙っていますからね。かなりの人数の狂信者を捕らえたものの、全員ではないでしょう。ですから、警戒するに越したことはありません」
マテリオも同意している。どういう意味で狙われているのか、よーく分かっていますとも。
「そうだなぁ。宰相は、俺が一人になる隙を窺っていたよな。さすがに王都の浄化を優先したみたいだけど。それに、ナトルの仲間がいなくなったとは思えない」
ついため息が漏れてしまう。
「あ、話を変えて悪いけど、王都に残っている王妃様と騎士達は無事かな。最新の情報は届いてるのか？」
「正直に言いますと、最近は連絡を取ろうとしても難しく、返事も途絶えているそうです」
「そんな」
あちらは瘴気の真っ只中だ。何があってもおかしくない。
「マテリオ、教会はどうだ？」
俺が聞くと、マテリオも首を横に振る。
「これから神殿に民を避難させると連絡があった後、反応がない。転送機のない場所に避難しているのかもしれないな。彼らの無事を祈ろう」

「そうだな……」
話しているうちに、テッサという町へ近づいていた。ここから二日もあれば王都に到着する。テッサと王都の間には小さな村しかないので、最終的な装備の確認もここでする。おそらく、浄化も必要だ。テッサという街は染色工場が多いそうで、興味をそそられている。
「テッサは黒染めで有名なのですよ」
エルビスが言う。王都にいた時、ダリウスと初めて街へ出た日のこと。あいつを「坊ちゃん」と呼んだ仕立屋グレンの店で見た、黒い生地がテッサ製らしい。なんだか、すごく前の話に感じる。
「そうなんだ。水に触る仕事だから大丈夫かな」
「きっと、今は仕事どころではないでしょう。トーラントへ向かう人々は必ずテッサを通るので、確実に瘴気の影響があるはずです」
「食料が足りなくなってないか心配だな」
人の往来が多くなって食料難に陥っているかもしれない。揉め事が起きてないといいな。
「テッサは工業の街で、穀物などは近隣から買っていたはず。苦しい状況かもしれない」
マテリオも深刻な顔で腕を組んだ。
「うん。トーラントで会った人達から情報をもらえて良かった。ヒルダーヌ様が送ってくれたキールやテポの実も役立つんじゃないかな。食料をめいっぱいマジックバッグに詰めてこれたし、間に入ってくれたダリウスに感謝だ」
バルバロイ家からトーラントに支援された物資を、途中の街に配給するために分けてもらってき

た。宰相がかなりごねたが、ダリウスが「全部俺ん家に返却するほうがいいか？」と脅したのだ。
宰相は憤怒の表情で睨みつけていたが、ダリウスは鼻で笑って承諾させた。あのメンタルの強さには本当に感心するよ。
「さあ、着きました。準備と情報収集も兼ねて、今夜はテッサに宿泊します」
「うん。俺も浄化や治癒を頑張る」
「私も魔石を使って手伝うから無理はするな。王都での浄化に備えてくれ」
マテリオは力の使いすぎを心配している。
「でも、困っている人がいたら助けてあげたいんだ。もちろん、当日魔力切れにならないように魔石も使う。それに、補充のエッチばかりじゃなくて、ちゃんとシたいしさ……無茶はしないって」
失神寸前でのエッチ＝補充の構図はもう終わりにしたい。だから、余裕がある時に魔石に充填してイチャイチャするという作戦だ。
ただ、王都ではエッチでの魔力補充が必要になるかもしれないので、いざという時の対策は話し合ってある。
「ジュンヤ様。そんな可愛い顔をされたら、民から隠してしまいたくなります」
「これ以上魅了される者は増やしたくない……」
自分がどんな顔をしているのかは分からないけど、俺がこれ以上誰かに惹かれることなんてないから安心してほしい。
「神子！」

背後から大きな声で呼ばれて振り向くとレニドールだった。多分……
「レニドール、どうした」
「違う。我だ」
レニドールじゃなくてラジート様だったようだ。浄化で落ち着いてレニドールに戻っていたはずなのに。
「何か起きたんですか⁉」
だが、ラジート様は焦っている俺を不思議そうな顔で眺めている。
「何の話だ？」
「呪が強まると出てこられるのではありませんか？」
「いや、違う。神子と話したかったから出てきたのだ。そこの者どもは控えていろ」
「「はぁ⁉」」
傲慢な言い草に、エルビスとマテリオ、俺達から少し距離を置いて控えていたラドクルト達まで憤っている。本当に空気が読めない人だよなぁ。
「落ち着いて」
揉めないよう、咄嗟に両者の間に割って入った。
「彼らの任務の邪魔はできません。話が聞こえない程度の距離で待機させます」
「……まぁいいだろう。いざとなれば人など簡単に蹴散らせる」
子供じゃないんだから、大人げないことしないでください。

皆もラジート様には人間の常識が通じないと知っているので、渋々距離をとってくれた。
「それで、何があったんですか」
「我の力が吸い取られ続けているのだ。呪を受けた当初は、我に瘴気を集め雁字搦めにされ、アレに操られていた。しかし、社の泉が浄化される直前から、我は力を失い始めた。故に、このままではアレが我が力を得ることになろう」
当たり前だけど、ナトルの名前を呼ぶのも嫌なんだな。
「その状態が続いたらラジート様はどうなってしまうんですか？」
「完全に神力を奪われれば、恐らく我は消えるであろう」
「そんな……」
ラジート様が消えてしまう？
この神様は、正直言って我儘だし自由奔放で振り回されることも多いけれど、レニドールを守ろうとしてくれたし、俺のことも守ってくれた。
「ナトルがラジート様に取って代わるんですか」
「アレは山や大地を守る気はないし、神力を得て悪用するだけであろう。アレの望みはそなたを手に入れることだけだ。そうなれば、大地の守護は消えこの地は荒れる。生命が育まれない不毛の地と化すかもしれぬ」
「ラジート様、絶対にナトルを倒しますから諦めないでくださいね！　大事な話なので仲間に共有してもいいですか」

ラジート様は沈黙した。迷っているのか、何度も顎を撫でている。
「――庇護者達のみだ。人間に同情や憐憫の目で見られたくない」
「分かりました」
俺はラジート様の手を握った。あなたの命は必ず守る。
「任せてください。必ず、あなたを解放してみせます」
「……神子」
「うわっ！」
真剣な話をしていたのに、突然ラジート様に顎に手をかけられ、キスされそうになる。おいおい、またかよ。懲りない神様だ。
「ダメですよ！」
必死に手でガードして唇を守る。
「我はメイリルを愛しているが、そなたのことも愛しいと感じる。刹那の時を生きる人間を庇護するのとは違う。特別な何かをそなたは持っているのだ」
「ラジート様、俺は……」
「そなたが我を愛さぬと分かっている。だが、我が消えるか神域に戻るか……それまではそなたを愛でることを許せ。口づけのみで構わぬ。そなたと口づけると淀みが薄らぎ、苦痛が引いてゆくのだ」
瘴気で苦しんでいたのは知っていた。だが、まだ苦痛が消えていないとは知らなかった。
「手を介しての浄化ではダメですか？」

キスは大事な人とする。大切な人のために、絶対に譲れないんだ。
「それでは足りぬ。だが」
ぐっと引き寄せられ、抱きしめられた。
「こうして……触れる部分が大きければいくらかマシだ」
皆にラジート様の苦痛を教えれば、ハグならギリギリ許してもらえる範囲だろう。
「庇護者に事情を説明して説得します。だから、これ以上はダメですよ」
「……分かった」
どうにか妥協してくれたものの、ラジート様は俺にべったりと抱きついた。王都の浄化終了までとはいえ、嫉妬深い恋人達の許可をどうやって得よう。
「ラジート、何をしている」
悩んでいると、視察の準備を終えたティアが戻ってきて、ティアに同行していたダリウスがラジート様を俺から引き剥がした。少し怖い顔をしていたので俺もビビってしまう。
「ダリウス。この件について説明する。少し時間をもらえるかな」
庇護者四人と、ラドクルト、ウォーベルト、神兵には共有の必要があると思い、全員集めてもらった。ラジート様には悪いが、信頼している四人の護衛には真実を話そうと思った。
王都にいるナトルにラジート様の神力が吸収されている可能性があって、最悪の場合力を奪われるかもしれない。大地への守護が消えた場合、全ての生命に影響が出る。
そんなラジート様の神力を維持するには、庇護者同様、体液の摂取が効果的だが、ハグで妥協してもらった……と説明した。
皆とても驚いていたが、事情が事情なので仕方ない、と渋々許可してくれた。しかし、四人それぞれからお願いもしっかりと要求された。ツケが多すぎて解決後が怖い……
だけど、どんな願いも聞いてやる！　皆の俺への想いと同じくらい、俺にとっても皆が特別なんだって知ってほしいからさ。
「よし！　テッサの浄化、開始だ！」
気合を入れて広場へと向かうと、俺達の到着の一報を聞いた人が大勢集まって平伏していた。
「私はテッサの村長をしております。殿下と神子のご来訪を歓迎いたします」
村長と名乗った年長の男性が、ティアに向かって挨拶した。
「楽にせよ。症状の重い者から神子のジュンヤが浄化をしてくれる。さぁ、皆も頭を上げてくれ」
ティアが穏やかな語り口で人々に声をかけると、張り詰めた空気がふっと和らいだ。人々の顔色は悪いが、苦痛から解放されるのではという期待が滲んでいる。
早速治療院へ案内してもらい、その後で村全体を浄化すると決めた。
でも、一つ気になったことがある。他の街では案内役として神官が出てきたが、この村の案内役は村長だった。
「こちらには神官はいるんですか？」
「王都の神官が月に二回ほど巡回に来ます。比較的王都が近いので、常駐するのではなく定期的に来てもらうんですよ」

「なるほど」
治癒ができる人間は限られているから、全ての町や村に配置するのは難しいのだろう。マナが各地の村を巡回しているのはそれが理由だったのか。
「こちらです」
「うっ……」
レンガを積んだ飾り気のない建物だ。ドアを開けてくれた村長に促されて治療院に入ると、酷い有様だった。これまで何度見た光景だろう。瘴気の臭いが部屋中に満ちていた。苦しげな呻き声もあちこちから聞こえている。
「マテリオ、マナ、ソレス、始めるよ」
「はい」
「ああ」
それぞれが患者に寄り添い魔石で浄化する。王都での浄化に向けて、大きな魔石は温存しなければいけない。小さな魔石を使っているせいで、瘴気を浄化して輝くと一瞬で役目を終えてしまう。どんどん砕け散っていくが、惜しみなく使う。
俺が浄化を担当する重症者を十人くらい浄化したところで、急に周囲がざわついた。
「神子様！　どうかうちの孫を助けてください！」
他の人を押し退けて、お祖父さんが俺のところまでやってきた。俺の腕にしがみつこうとして、護衛に止められていた。浄化の順番を待っている人達に、順番を守れと文句を言われている。すぐ

浄化してやりたいが、誰かを特別扱いすると不満を持つ人が出てしまうだろう。
「お孫さんも必ず浄化しますから、心配しないでください」
そう伝えて、しっかり約束を守ることしか俺にはできない。彼は村長に宥められ、自分の場所に戻っていった。
その後も浄化を進めていき、列の最後は、並び直したさっきのお祖父さんとお孫さんだった。
「お待たせしました。彼は何て名前ですか？」
「ニルバです」
「分かりました。ニルバ君、触るよ」
お祖父さんに抱かれている子供は小学校低学年くらいの年齢だ。ぐったりと目を閉じている。俺は意識のないニルバ君の手を握って、体内に巣食う瘴気を引き出し浄化した。
「っ、うぅ……ん」
瘴気は予想より多く溜まっていて、少しだけ手こずったが、無事に全て浄化できた。手を握り返してきた彼の目が開く。
「ニルバ！　目を覚ましたのか！　良かった……！」
「お祖父、ちゃん……？」
「目覚めて良かった！　神子様が助けてくださったぞ！」
「ありがとう。お祖父ちゃん、父さんと、母さんは……？」
「浄化してもらった！　もう大丈夫だ！」

さっき浄化した中に彼の家族もいたらしい。俺はニルバ君に微笑みかけた。
「もう大丈夫だよ。ご飯をしっかり食べて、元気になるんだ」
二人は手を取り合って大喜びしている。だが、お祖父さんも浄化をしなくちゃいけない。
「お祖父さん、手を貸してください」
「え？　失礼な真似をしてしまったのにいいんですか」
「もちろん。だって、大事なニルバ君のためだったんでしょう？」
俺はお祖父さんの手を取って浄化をする。
「あぁ……これが浄化……温かい……」
閉じられたお祖父さんの目尻から涙が溢れた。こんなに感動してもらえるなんて疲れが吹き飛ぶ。
「これであなたも大丈夫です」
「神子様。家族を救ってくださったご恩は、いつか必ずやお返しいたします！」
「そんな。ご無理はしないでください！　俺は自分にやれることをしただけです」
深々と頭を下げるお祖父さんや患者に別れを告げ、街全体の浄化を行うため広場へ向かった。
「ジュンヤ、準備ができた。民に慈悲をかけてやってくれ」
ティアは慈悲をかけるなんて言うが、そんなお偉い人間じゃない。でも、希望がなければ人は生きられない、だから今は神子という役を演じ切るつもりだ。
広場にいる民達の浄化は、ティアから効率のいい浄化方法と演出を提案されていた。それにのっとって、神官としてマテリオが祈りの言葉を唱え、俺が樽に入った水を浄化する。柄杓で水を汲み、

自分の手で渡すと、痩せ細った人達が笑顔を向けてくれた。自己満足かもしれないが、何もできないよりずっといいと思うんだ。

翌日、俺達はテッサを後にした。途中の村や道中ですれ違った避難民の中にいた重症者を浄化しながら、ひたすら王都を目指し突き進んだ。
ティアはレナッソーを出発する前に、バルバロイ領にいるダリウスの兄、ヒルダーヌ様に、ユーフォーンの騎士とイスバルの騎士を貸してほしいと応援要請をしていた。各部隊の到着まで王都に入らず、詳細な情報収集と作戦を練っている。
というのも、問題があった際に最前線で戦う第三騎士団の騎士が、偵察をして王都の現状を俺達に知らせてくれていたからだ。当初はすぐ王都に入るつもりだったが、城壁の内側に瘴気が充満し、病人が多数いるとのことだった。そこで、壁外で待機するのが安全と判断した。
偵察の騎士に渡していた浄化の魔石はとっくに砕けていた。そのせいで瘴気の影響で彼らの目の下には真っ黒なクマがあり、大慌てで浄化した。新しい魔石も持たせたので、きっと回復するだろう。
偵察が集めた情報をまとめていると、遠くから蹄の音が聞こえた。ネイビーの制服を纏う騎馬隊の先頭に見覚えのある人物がいる。
「エリアス殿下、ダリウス様、ジュンヤ様。お呼びとあり馳せ参じました」
ユーフォーン騎士で、ダリウスの叔父、ザンド団長の部下グラントだ。ティアの天幕の前に設けた会議の場に合流すると、グラントはティアに片膝をついて礼をした。以前は俺を神子と認めてい

なかった彼とは揉めたことがあったが、今では和解し俺も信頼を寄せている。この遠征では団長として精鋭を引き連れてきてくれた。頼もしい仲間が増え、巡行のメンバーの士気も上がっている。
「皆、よく来てくれた。もうすぐイスバルからの応援も到着する。全員が揃ったら作戦会議を始める」
「はっ」
ティアが騎士らを労い、ダリウスがグラントに話しかける。
「よく来てくれた。頼りにしているぞ」
「グラント、来てくれてありがとう」
礼を言うと、彼は俺にも深々と頭を下げた。
「実は、ザンド団長自ら来たいと仰っていたんですが、さすがにそれはまずいと思って止めました。――それで良かったよな？」
グラントがダリウスの顔色を窺う。
ザンド団長はバルバロイ領の防御の要なのに、ここに来たらまずいだろ。でも、ゴネている場面は容易に想像できるんだよなぁ。
「ははっ！　叔父上はまだまだ血気盛んだなぁ。止めてくれて助かったぜ。叔父上がいてくれれば領内は安泰だからな」
二人が和やかに話し始めたので、俺はその場を離れて魔石への充填をすることにした。たとえざれ石でもまとめて持てば役に立つ。それはテッサで実践済みだ。ただ、小さい魔石は充填する際に割れやすいので調整が難しい。

この一粒が誰かを救える……
黙々と充填していたら、大きな手が俺の手を覆った。
「マテリオ？　何？」
「何、じゃない。少し休め。お前、ずっと休んでいないだろう」
「え、そんなに時間経ってた？　集中していて気づかなかった。……確かにちょっと疲れたかも。天幕で少し休もうかな」
マテリオの隣には心配そうな顔をしたエルビスもいる。俺が休むと言った瞬間、明らかにホッとしていた。俺、無理しているように見えたのかな。
「ええ、お茶をお出ししますね」
天幕の中には椅子とテーブルが用意されている。エルビスが淹れてくれたお茶がいつもより熱く感じ、ようやく体の冷えを自覚した。なるほど、二人が心配するわけだ。
「エルビス、マテリオ。あのさ……キスしてくれるかな」
「もちろん、大歓迎です」
エルビスが屈んで優しく抱きしめてくれたので、俺も抱き返す。
「んっ、んっ、はぁ……もっと」
お互いの舌を絡ませ、エルビスから与えられる力を嚥下すると、体の奥にじわじわと熱い力が広がってくる。
「ふぁ……エルビス、もっと」

「はい、喜んで」
たっぷりと甘い滴をもらったところで、エルビスがそっと俺を離した。
「ん……離れないで、もっと欲しい……」
「次はマテリオですよ。交互に差しあげますからね。ほら、見てください、あの男の顔を。あなたに早く口づけたくてうずうずしていますよ」
エルビスは頬を撫で、俺の顔をマテリオに向けた。表情こそ変わらないが、爛々(らんらん)とした目で俺を見つめていた。
「マテリオ」
両手を広げて呼ぶと、マテリオはいそいそと近寄り、俺を抱き上げ自分の膝に乗せた。
「口づけていいか？」
「いちいち確認すんな。ん」
腕の中で顔をあげ、キスしろと強請(ねだ)る。触れたところから力が漲(みなぎ)り、甘くてあったかくて、ずっとこのままでいられたら……なんて、現実逃避にもほどがあるよな。王都の門を目の前にして、得体の知れない恐怖に襲われていたことを自覚する。
「はぁ……」
唇が離れ、マテリオが真剣な眼差しで俺を見下ろす。
「ジュンヤ、絶対に守ってやる」
「私も、皆も付いています」

「俺も、皆を守る……」
苦しんでいる人を救えるのは俺の浄化だけだ。恐怖を感じるのは人間だから仕方ない。
二人とキスを繰り返していると、冷え切っていた体に力が戻っていった。
「ありがとう。もう大丈夫だよ」
「お前はいつも無意識に無理をする。気をつけろ」
マテリオさん、指摘が厳しいです。でも、注意してくれてありがとうな。
いつも通り動けるようになり天幕を出ると、さっきよりも人が増えていた。その中心に、シルバーに輝く長髪が見える。人垣をかき分けると、俺だと気づいた騎士が道をあけてくれる。気配に気づいてこちらに振り向いた人物の髪が光を反射して揺れた。
「ジュンヤ様！　お呼びとあり馳(は)せ参じました」
応援要請に応えてくれたのは、トラージェとの国境にあるイスバル砦(とりで)の団長エマーソンさんだった。彼は過去にダリウスと体の関係があったが今はもう清算している。イスバル砦(とりで)を訪問した際に隊員の浄化をしたのだが、その時に恩返しをすると言ってくれていた。
「エマーソンさんが直々に来てくれたんですか！」
「当然です。ジュンヤ様は恩人ですよ」
確かに増援は欲しかったが、砦(とりで)の騎士団長であるエマーソンさん自ら騎士を率いて来るなんて。
「団長が来てしまって砦(とりで)は大丈夫ですか？」
「彼らはしっかりと鍛(きた)えておりますからご心配なく。ジュンヤ様の要請とあらば、どこへでも参り

ますとも」
「ありがとうございます！」
エマーソンさんの心強い言葉と朗らかな笑顔に癒される。この人は性癖が特殊でさえなければ完璧なのに。いや、それもエマーソンさんの一部だよな。
「おや、また誰か来ましたね。あれは……？」
エマーソンさんはわずかな音にも敏感だ。彼が示す方向に目を向けると、立派な馬車から降りて来たのはアリアーシュだった。
「アリアーシュも来てくれたんだ」
ティアはアリアーシュにも応援要請をしていたようだ。歩夢君にも会いたかったが、危険だから本人は来ないみたいだ。会えなくて少しがっかりした。
アリアーシュとは深い因縁がある。神子の召喚の儀を指揮した優秀な魔導士らしいが、俺のことを毛嫌いしていた。今も仲がいいとは言えないが、多少は歩み寄れた……のか？
疑問だが、歩夢君一筋なのは信じている。歩夢君と恋人になったと聞いた時、自称保護者の俺は衝撃を受けたな。
「私が来たのはあくまでも殿下のためだ。ところで、この魔道具はアナトリー殿が作ってわけてくれたものなのだが、このボタンを押してみろ」
一方的に捲し立てられる。相変わらずだ。
渡されたのはスマホサイズの箱だが、厚さが三倍くらいあってめちゃくちゃ重い。アリアーシュが指差した真ん中のボタンを押すと黒い画面が少しずつ明るくなり、歩夢君の姿が浮かび上がった。
『潤也さん～！　元気？』
「歩夢君！」
リモートミーティングができる魔道具を作っていたなんて。さすがマッドな魔導士アナトリーだ。
「ずっと心配してたよ！　無事で良かった……！」
「ありがとう。やっとここまで来たよ。歩夢君のほうは大丈夫？」
『うん、なんとかやってる！　浄化はできないけど、新しい魔道具のアイデアはいっぱいあるよ～』
えへんと胸を張り、ちょっとだけ大人びた表情をした。
『潤也さん。僕も、僕にできることをやってるよ』
キリッとした表情が頼もしい。
「歩夢君……頑張ってるね。すごいよ」
俺はぎゅっと魔道具を握りしめた。前よりずっと強くなったな。ちょっと寂しいけど嬉しい。心配してくれてありがとうと伝えたいのに、胸がいっぱいで上手く言葉が出ない。
『へへ、それと、やっとマテリオとも恋人になったんだよね。おめでとう！』
「そうなんだよ。えっと、ありがとう」
歩夢君が、マテリオを俺と一緒に行かせるようにと勧めてくれたのは、恋人になる可能性を知っていたからだろうか。もし別行動だったら、きっと親友止まりだったな。
『ジュンヤさんのほうに行かせて良かった。僕、マテリオに幸せになってほしかったんだ～』

「来なかったら、何か変わっていたのかな」
俺の質問に歩夢君は笑った。
『ふふっ、やだなぁ。潤也さんが言ったんでしょう？　ここはゲームとは違う現実だって。だから、どうなるかなんて分からなかったよ。ただ……最悪な状況を避けたかっただけ。でも、それが何かは言わないよ』
歩夢君は最悪の可能性を回避させたかったのだろう。確かに、そんなこと知る必要ないな。
「さて、全員が集まったな。最新の報告を聞こう」
ティアの命令で軍議に呼ばれた偵察の騎士は、錚々たるメンバーに緊張している。
「ご報告いたします。壁内ですが、瘴気がこもり酷い有様です。王都の騎士団に余力はありません。下賜してくださったジュンヤ様の魔石は……陛下や宰相達が半分以上持っていってしまったとか」
騎士はティアに気遣い言葉を濁す。だが、ティアは冷静に話を促した。俺達はもう知っているので驚かないが、グラントとエマーソンさんは話を聞いて憤っている。
「残っていた魔石も割れ始めました。そこで、ジェイコブ大司教が民を神殿に受け入れ、避難したそうです。一部の魔石は宮殿の一室に避難した王妃の守護に回しているので、騎士の多くが穢れに苛まれています」
先行して来ていた騎士の様子で酷い状況と察していたが、想像以上かもしれない。
一度言葉を切った偵察の騎士は大きく息を吸い、硬い表情で話し出した。
「瘴気の発生源であるナトルですが、玉座を奪い、王の間を占拠しているとのことです」

立ち読みサンプル
はここまで

「なんだと！」
ダリウスが叫ぶ。
「ラジートになり代わって己が神となり、国を支配するつもりではと思っていた。王座につき、ジュンヤを王妃とするつもりかもしれないな」
だが、ティアは動じていない。想定内だったのか……
「殿下、お待ちください。ラジートになり代わると言いましたか？　その、どういうことでしょうか？」
ラジート様がレニドールの体に宿っていることを知らないグラントとエマーソンさんは、いきなりラジート神の名前が出てきたことに困惑している。
「ああ、言った。ジュンヤ、レニドールはいつでもラジートと入れ代われるようになったのか？」
「多分……」
答えると、ティアはグラントとエマーソンさんに視線を向けた。
「二人にはまだ話していなかったな。ナトルは呪でラジートを縛り、神力を取り込んでいるようだ。完全に奪い去った時、奴は神になるという計画だろう」
ティアの説明に、彼らは度肝を抜かれ絶句した。
「ラジートも参加してもらいたい。ジュンヤ、呼んできてもらえるか？」
「任せて」
あの人が頼みを聞いてくれるのは俺だけだ。